震災から11年。
これからも、ともに。

①

東日本大震災発生から11年目を迎えた3月11日、市内各地で追悼行事が開催されました。

釜石市民ホールTETTOで開催された釜石市東日本大震災犠牲者追悼式は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、規模を縮小して開催。14時46分のサイレンに合わせ黙とうをささげ、花を手向けました。

遺族代表の沖健太郎さんは「もし、私が一緒にいたらどうなっていたかと、時々考えてみる。同じように津波に呑まれてしまっただろうか。あるいは一緒に逃げただろうか。果たしてどうなっていたか、今となっては分からない。これから残された遺族として、前向きに生きて行きたい」と故人に思いを寄せました。

この11年で建物の整備がおおむね完了し、失った街並みも取り戻してきました。「昔○○だった場所」こんな表現も少なくなり、薄らぐ記憶とともに時の流れを感じます。しかし、この日が来ると、あの時の感情、あの出来事をきっかけに改めて気づいた絆の大切さ、強さを思い起こしたはずです。一人一人が大切な人を思い、周りで困っている人がいれば手を差しのべ、時には頼る、そんなまちを目指し、一歩ずつ前に歩んでいきましょう。

②③④⑤⑥⑦⑧

①根浜海岸で打ち上げられた祈りの花火「白菊」
②身をていして殉職した８人の消防団員の名前が刻まれた東日本大震災殉職消防団員顕彰碑に向かい、祈りがささげられました（鈴子広場）
③北九州市の小倉城竹あかり実行委員会から寄贈された竹灯籠に灯りを灯しました（釜石駅前広場）
④大平墓地公園の東日本大震災物故者納骨堂では、身元が判明していない方々の供養が、釜石仏教会の協力で執り行われました
⑤宝来館では「くらぶ海音（うみのおと）」が鎮魂の祈りを込め、音を奏でました
⑥釜石市東日本大震災犠牲者追悼式、遺族代表の沖健太郎さん
⑦⑧釜石祈りのパークでは、多くの人が慰霊碑に花を手向け、手を合わせました

今だから伝えたい。
―この教訓を後世に―

東日本大震災の経験や教訓、防災の取り組みを未来につなげたい―。そんな思いを持った釜石高校の生徒有志が2019年12月に立ち上げた伝承・ボランティア活動に取り組むグループ「夢団（ゆめだん）～未来へつなげるONE TEAM～」（以下、夢団）。現在は、卒業生も含め約50人の有志が所属しています。震災の時に幼かった今の高校生たちが何を思い、何のために活動しているのか。彼女らがいま「伝える」こととは。

東日本大震災を経験した時、私は児童館の年長でした。まだ幼かったですが、当時の地震や津波の様子はかなり鮮明に覚えています。私たちの児童館では全員無事に避難することができました。それは、日常的に行っていた避難訓練の影響が大きかったと思います。しかし、当時避難訓練はしていたものの「津波」とは何なのか、なぜ怖いのか、なぜ逃げなければいけないのかはほとんど理解していませんでした。年齢が上がるにつれて、訓練の大切さや地震や津波の怖さを理解していきました。

高校に入学して、生徒の有志で防災や伝承に取り組んでいる夢団という団体に入りました。夢団に入り、さまざまな人と出会い、自分の気持ちや防災を伝える活動を通して、さらに防災の重要性を感じました。現在、夢団で私の担当する班では「防災すごろく」を作成しています。楽しみながら学び、自分で逃げられる人になってほしいからです。今後も、防災を多くの人に伝える活動をしていきます。

釜石高校３年　川原 凜乃（りの） さん

当時は幼稚園の年長で、経験したことのないほどの揺れに恐怖しかありませんでした。私の住む地域は津波の被害はありませんでしたが、何年経過しても当時の映像を見ると恐怖に包まれます。しかし、震災を経験したことが将来を考えるきっかけになりました。

高校生になり、震災の記憶がある最後の世代と言われている中、その経験や出来事は次の災害へ備えるためにも、絶対に風化させてはいけないと深く考えるようになりました。その思いから始めた伝承者としての活動で、語り部として自分の言葉で伝えるというのはとても意義を感じています。

避難訓練や防災授業、震災を知るためのイベントによって、震災を経験した人も経験していない人も防災の大切さを感じてもらい、日常から災害に備えた行動をとることができるので、防災や災害に関わる取り組みをより多くの人に知ってもらいたいです。

震災の記憶がある最後の世代として、震災の出来事を伝え続けていきます。

釜石高校３年　戸澤 琉羽（るう） さん

夢団公式 Instagram